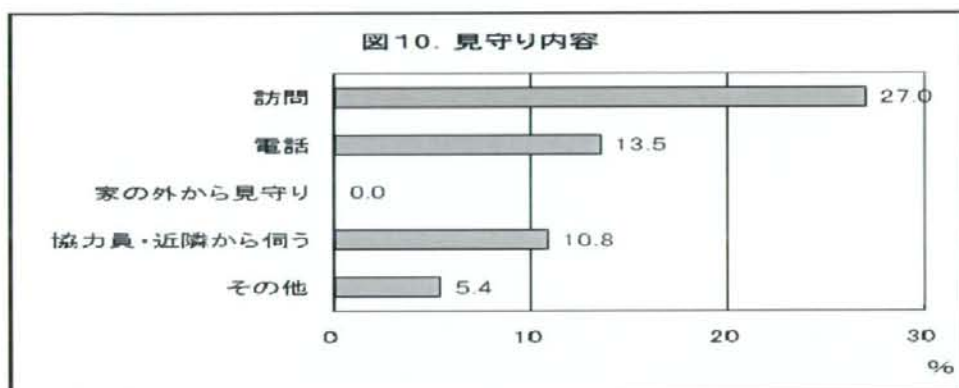


見守りの内容別にみると（表9、図10）、自らの訪問のみならず、電話や近隣等と協同で行っている。

**表9. 見守り内容(複数回答)**

	人数	%
訪問	10	27.0
電話	5	13.5
家の外から見守り	0	0.0
協力員・近隣から伺う	4	10.8
その他	2	5.4



(3) 見守りしている人数と頻度

①人数

見守りしている人数は、3人以下が最も多かったが、6から10人以上も4割以上を占めていた（表10）。

**表10. 見守り内容別にみた見守りしている人数(複数回答)**

見守り人数	訪問人数		電話人数		協力員・近所人数	
	人数	%	人数	%	人数	%
1人	2	20.0	2	40.0	1	25.0
2~3人	4	40.0	1	20.0	2	50.0
4~5人	0	0.0	0	0.0	0	0.0
6~10人	4	40.0	1	20.0	0	0.0
無回答	0	0.0	1	20.0	1	25.0
合計	10	100.0	5	100.0	4	100.0

②頻度

見守り頻度は2～3日から30日に一度、と様々であった。見守り対象者の健康状態により見守り頻度を変える人もいた。

**表11. 見守り内容別にみた見守り頻度(1回/日、複数回答)**

見守り頻度 (1回/日)	訪問日		電話日		協力員・近所日	
	人数	%	人数	%	人数	%
毎日	0	0.0	0	0.0	0	0.0
2～3日	1	9.1	0	0.0	0	0.0
4～7日	2	18.2	3	60.0	2	50.0
8～10日	1	9.1	1	20.0	0	0.0
11～14日	0	0.0	0	0.0	1	25.0
15～30日	3	27.3	0	0.0	0	0.0
不特定	1	9.1	0	0.0	0	0.0
無回答	3	27.3	1	20.0	1	25.0
合計	11	100.0	5	100.0	4	100.0

その他の具体的な見守り内容は表12のとおりである。

**表12. その他の見守り内容**

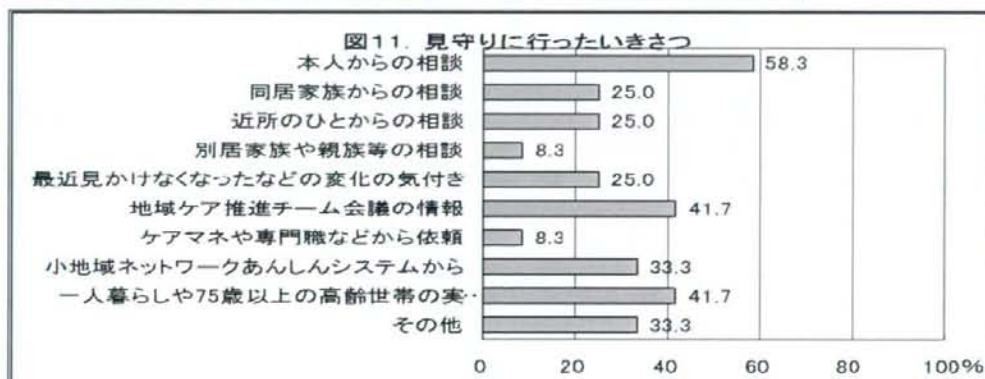
- ・一人暮らしの高齢者、伝言のある時に訪問
- ・休日に一度とか決まっていなかったが時間のできたときに伺う。

#### (4) 見守りを行ったいきさつ

見守りに行ったいきさつ別にみると(表13、図11)、「本人からの相談」が7人(58.3%)、「一人暮らしや75歳以上の高齢世帯の実態把握から」、「地域ケア推進チーム会議の情報」が5人(41.7%)と多くみられた。

**表13. 見守りに行ったいきさつ(複数回答)**

項目	n=12	
	人数	%
本人からの相談	7	58.3
同居家族からの相談	3	25.0
近所のひとからの相談	3	25.0
別居家族や親族等の相談	1	8.3
最近見かけなくなったなどの変化の気付き	3	25.0
地域ケア推進チーム会議の情報	5	41.7
ケアマネや専門職などから依頼	1	8.3
小地域ネットワークあんしんシステムから	4	33.3
一人暮らしや75歳以上の高齢世帯の実態把握から	5	41.7
その他	4	33.3

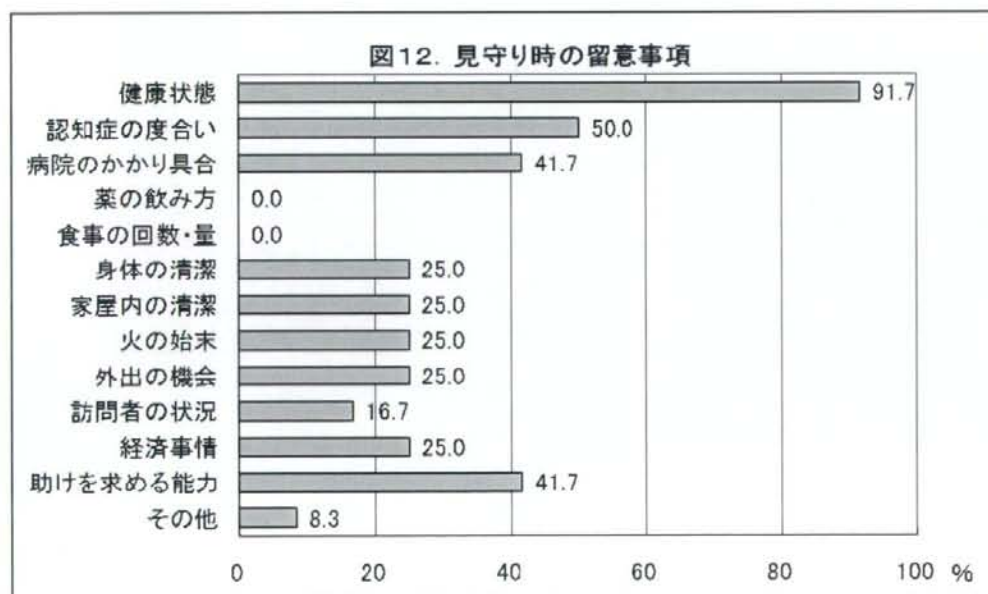


#### (5) 見守りの際の留意事項

見守りの際に注意していることを項目別にみると（表 14、図 12）、「健康状態」が 11 人（91.7%）と高く、次いで「認知症の度合い」が 6 人（50.0%）、「病院の可かかり具合」、「助けを求める能力」が 5 人（41.7%）と身体状態に注目している。

**表 14.見守りの際の留意事項(複数回答) n=12**

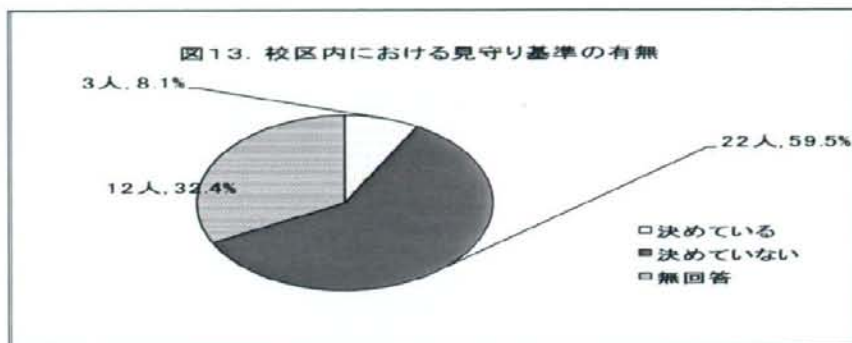
項目	人数	%
健康状態	11	91.7
認知症の度合い	6	50.0
病院のかかり具合	5	41.7
薬の飲み方	0	0.0
食事の回数・量	0	0.0
身体の清潔	3	25.0
家屋内の清潔	3	25.0
火の始末	3	25.0
外出の機会	3	25.0
訪問者の状況	2	16.7
経済事情	3	25.0
助けを求める能力	5	41.7
その他	1	8.3



(6) 地区での見守り基準の有無とその内容

### ①見守り基準の有無

地区内での見守り基準の有無をみると（図 14）、「決めている」が 3 人（8.1%）、「決めていない」が 22 人（59.5%）、「無回答」が 12 人（32.4%）であった。地区で見守り基準を決めているのではなく、それぞれが自分の基準で行っていた。



### ②内容

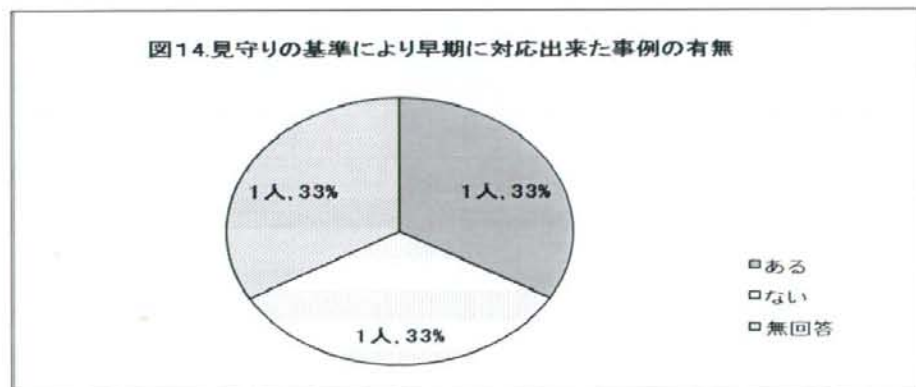
校区内における見守りの基準の有無で「決めている」と答えたもので、その具体的な内容は表 15 のとおりである。

表 15. 見守り基準内容

- ・各地区の会員に連絡があり次第行動に移し、問題点把握のため、現場へ直行確認の上、対処します。
- ・気掛かりな事例があった場合
- ・雨戸があくか不在か

### ③早期に対応できた事例の有無

校区内における見守りの基準の有無で「決めている」と答えたもので、見守りの基準により早期に対応出来た事例の有無をみると（図 14）、「ある」が 1 人（33%）、「ない」が 1 人（33%）、「無回答」が 1 人（33%）であった。



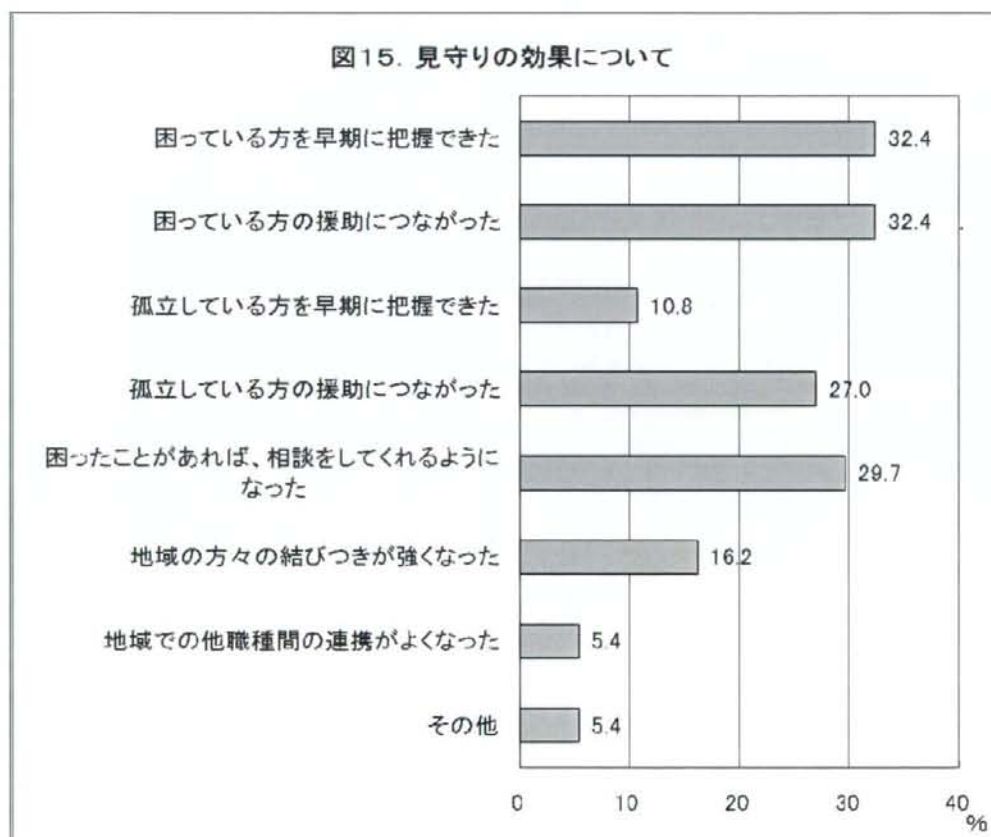
### (7) 見守りの効果

見守りの効果を項目別にみると（表 16、図 15）、困っている高齢者の早期把握ができたり、援助につながったり、地域住民からの相談が積極的にあるなど、住民との結びつきが強くなったと回答している。

表 16. 見守りの効果について(複数回答)

内容	人数	%
困っている方を早期に把握できた	12	32.4
困っている方の援助につながった	12	32.4
孤立している方を早期に把握できた	4	10.8
孤立している方の援助につながった	10	27.0
困ったことがあれば、相談をしてくれるようになった	11	29.7
地域の方々の結びつきが強くなった	6	16.2
地域での他職種間の連携がよくなった	2	5.4
その他	2	5.4

図 15. 見守りの効果について



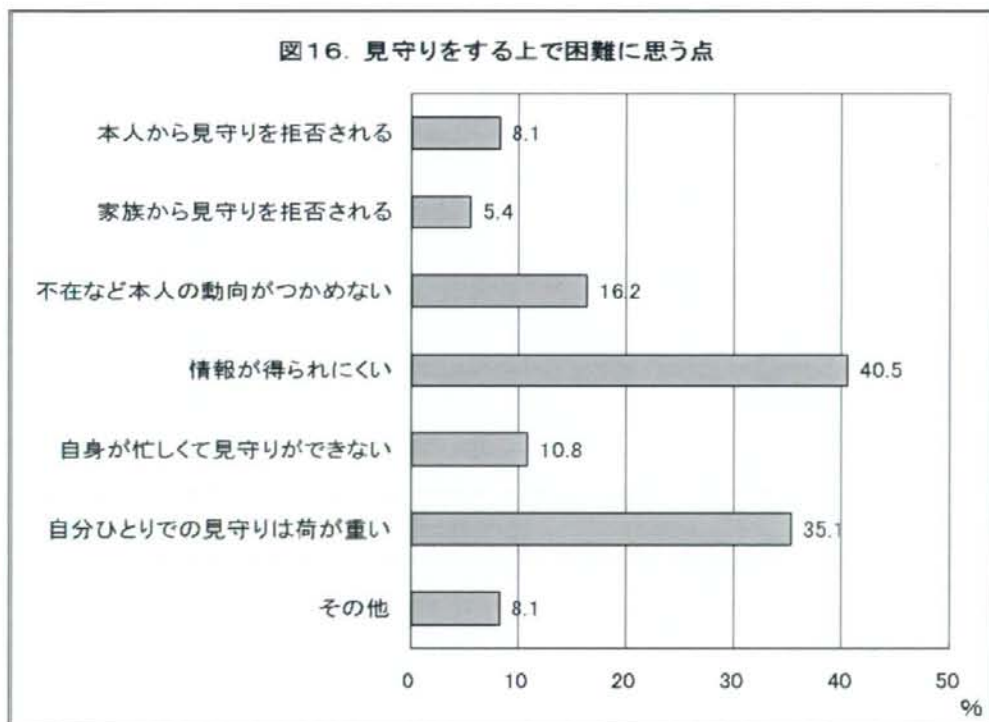


#### (8) 見守りの困難な点

見守りの困難な点は（表17、図16）、情報が得られにくい、不在など本人の動向がつかめない、という見守り対象の状況がわからないという点と、自分ひとりでの見守りは荷が重い、忙しくて見守りができないという見守り体制に関する点があげられた。

**表17. 見守りをする上で困難に思う点(複数回答)**

内容	人数	%
本人から見守りを拒否される	3	8.1
家族から見守りを拒否される	2	5.4
不在など本人の動向がつかめない	6	16.2
情報が得られにくい	15	40.5
自身が忙しくて見守りができない	4	10.8
自分ひとりでの見守りは荷が重い	13	35.1
その他	3	8.1

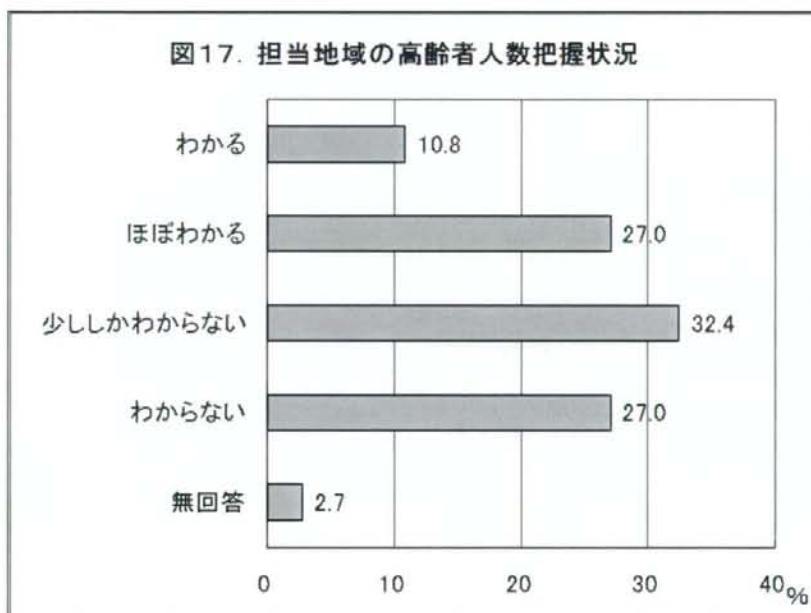


(9) 担当地区の高齢者の人数の把握の有無

担当地区に住んでいる高齢者の人数把握についてみると（表 18、図 17）、「わかる」が 4 人（10.8%）、「ほぼわかる」が 10 人（27.0%）、「少ししかわからない」が 12 人（32.4%）、「わからない」が 10 人（27.0%）で、わからない人の方が多かった。

表 18 担当地区に住んでいる高齢者人の人数を把握しているか

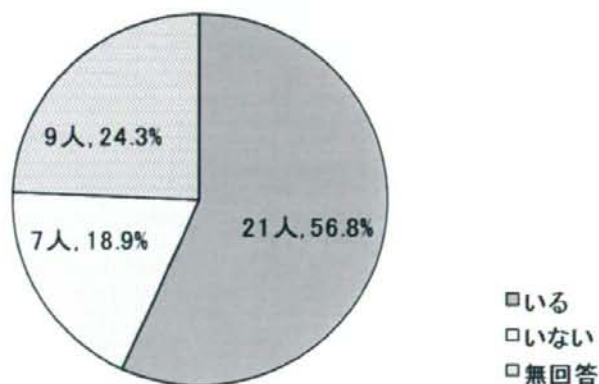
わかる	4	10.8
ほぼわかる	10	27.0
少ししかわからない	12	32.4
わからない	10	27.0
無回答	1	2.7
合計	37	100



(10) 担当地区の高齢者で情報が得られにくい方の有無

担当地区の高齢者で情報が得られにくい方の有無をみると（図18）、「いる」と答えたものが21人（56.8%）、「いない」と答えたものが7人（18.9%）、「無回答」が9人（24.3%）で、半数近くがいると回答していた。

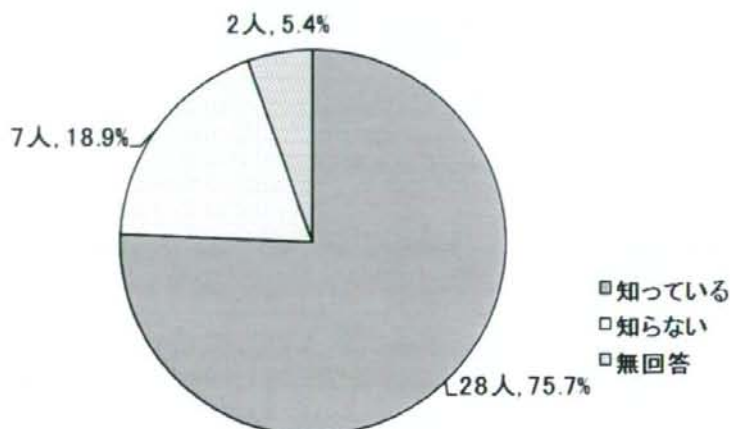
図18.担当地域高齢者で情報が得られにくい方の有無



(11) 小地域ネットワーク「あんしんシステム」の認知の程度

小地域ネットワーク「あんしんシステム」の認知の程度は、約75%が知っていると回答していた。

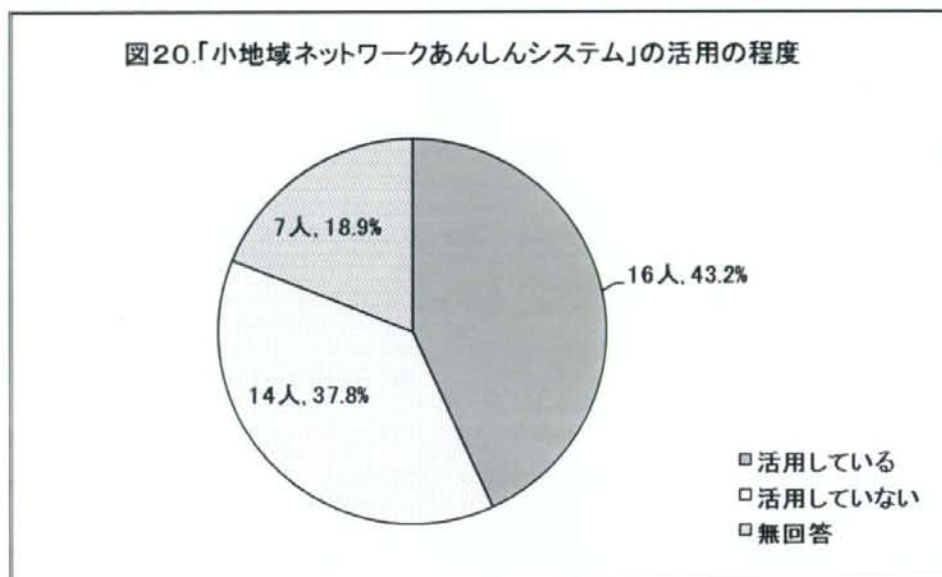
図19.「小地域ネットワークあんしんシステム」の認知の程度





(12) 小地域ネットワーク「あんしんシステム」の活用の程度

小地域ネットワーク「あんしんシステム」の活用の程度は、約40%が活用していると回答していた(図20)。



(13) 見守り活動についての意見

見守り活動についての意見では、実際に見守りを行う際の難しさ、見守りシステム、今後の活動参加の意向が述べられていた(表19)。

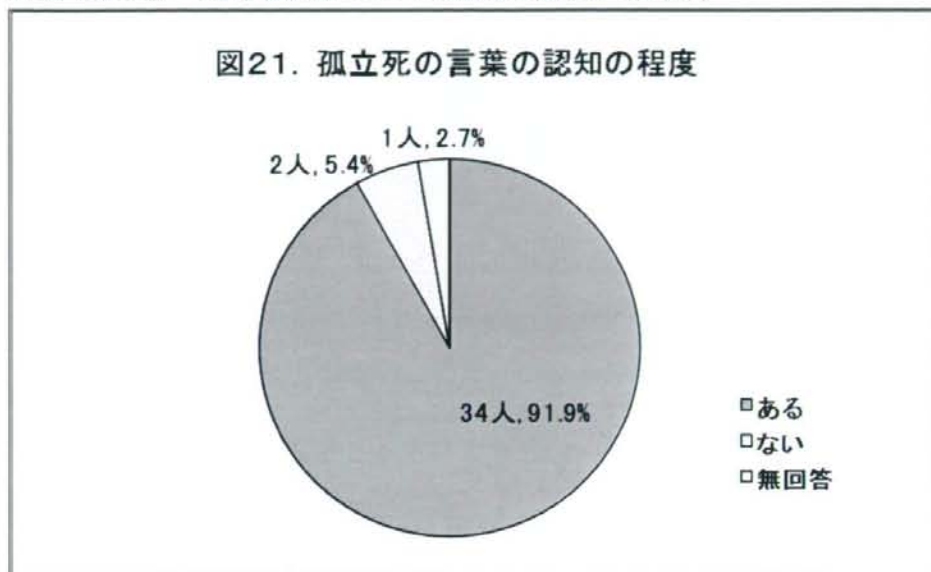
表19. 見守り活動についての意見

- ・24時間を部屋の灯りをつけた状態で生活していらつしゃると日常でいつ起きているのかわからない。
- ・個人情報等の問題で親兄弟姉妹などの情報が入りにくいいため連絡先などが把握できない。
- ・コミュニケーションがとれている人はよいがそうでない人が見守りできてない。
- ・まず信頼してもらえることがら始まる。
- ・多くの協力者を得るよう努める。話し合いを通じ共通理解をはかりながら進める
- ・地区一人一人が見守りの中に、また見守られの中にいると考えている。
- ・毎月各地域ごとにサロンを開いたり、一人暮らしの会を開催していますが、それに参加される方はよいのですが、外出されない方々をどのようにすれば参加していただけるか、また実際困っておられるのに、介護保険や福祉資源等の活用や利用方法を知らない人が多いので、この活動を通じてわかっていただけるようにできればと思います。
- ・今はお手伝いはしていませんが今後お手伝いをさせていただきます。

#### 4) 孤立死の状況

##### (1) 孤立死の言葉の認知の程度

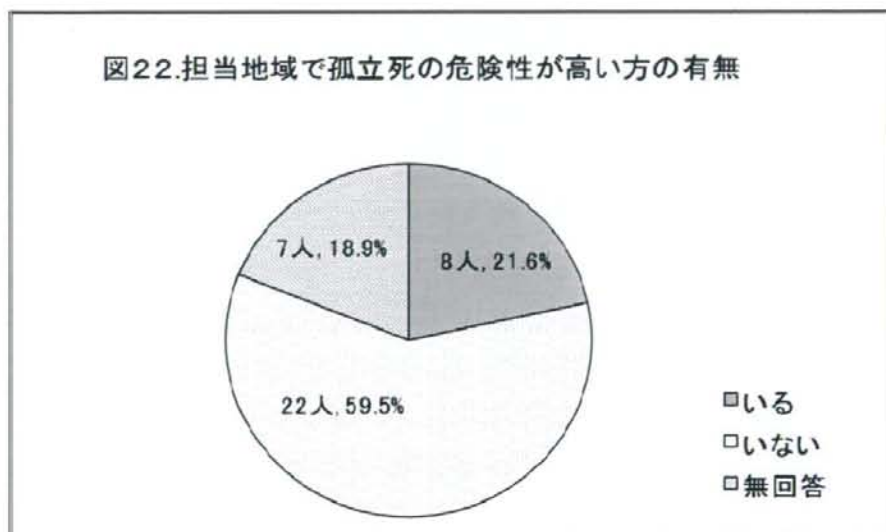
「孤立死という言葉を知っているか」という問いに対し、「ある」と答えたものは34人(91.9%)で約9割が聞いたことがあると答えた(図23)。



##### (2) 担当地域で孤立死の危険性が高いと考えられる方の有無

###### ①有無

「担当地域に孤立死する危険性が高いと考えられる方はいるか」という問いに対し、「いる」と答えたものは8人(21.6%)で「いない」と答えたものは22人(59.5%)、「無回答」は7人(18.9%)であり(図24)、2割強が危険性の高い人がいると回答している。



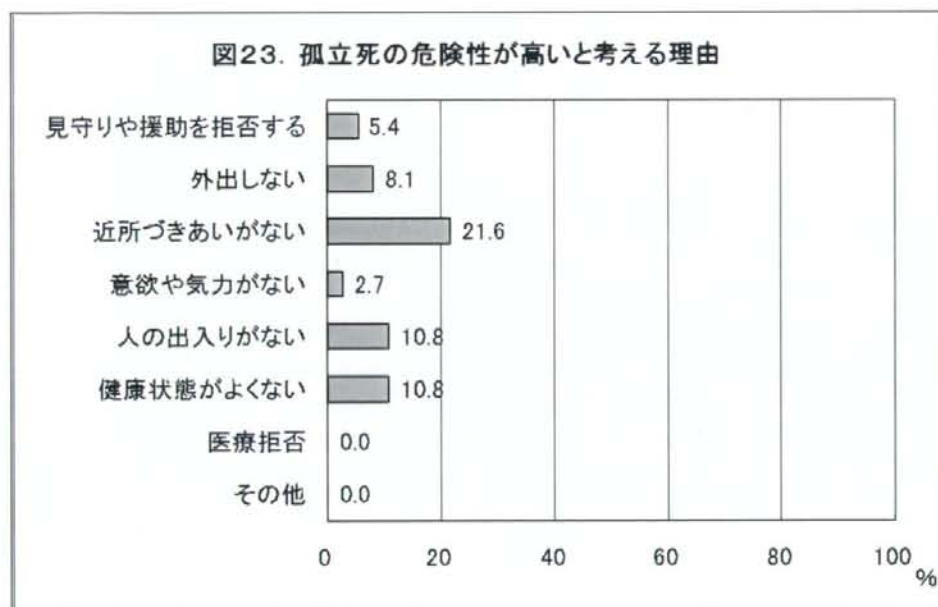
## ②理由

①において、孤立死の危険性が高いと思った理由として表 20、図 23 をみると、健康状態がよくないことよりも近所付き合いがない、人の出入りがないことが孤立死のハイリスクと認識されていることがわかる。

**表20. 孤立死の危険性が高いと考える理由(複数回答)**

項目	人数	%
見守りや援助を拒否する	2	5.4
外出しない	3	8.1
近所づきあいがない	8	21.6
意欲や気力ががない	1	2.7
人の出入りがない	4	10.8
健康状態がよくない	4	10.8
医療拒否	0	0.0
その他	0	0.0

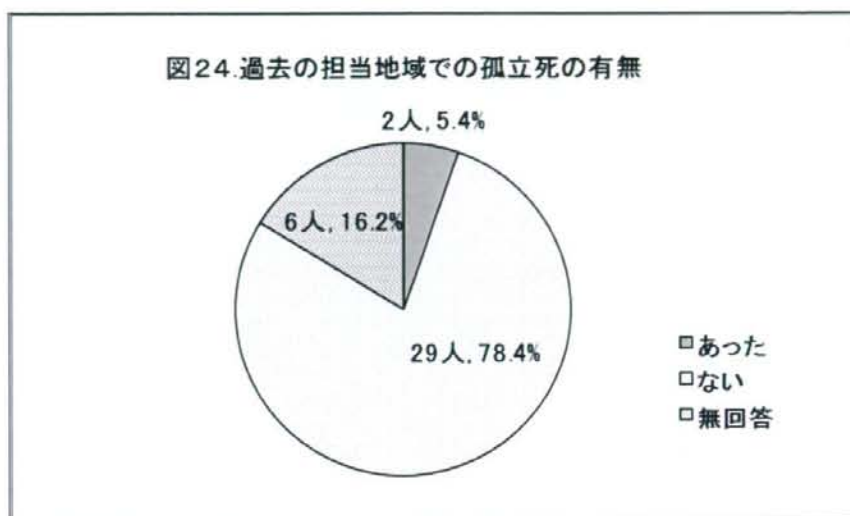
**図23. 孤立死の危険性が高いと考える理由**



### (3)過去の担当地区での孤立死の有無

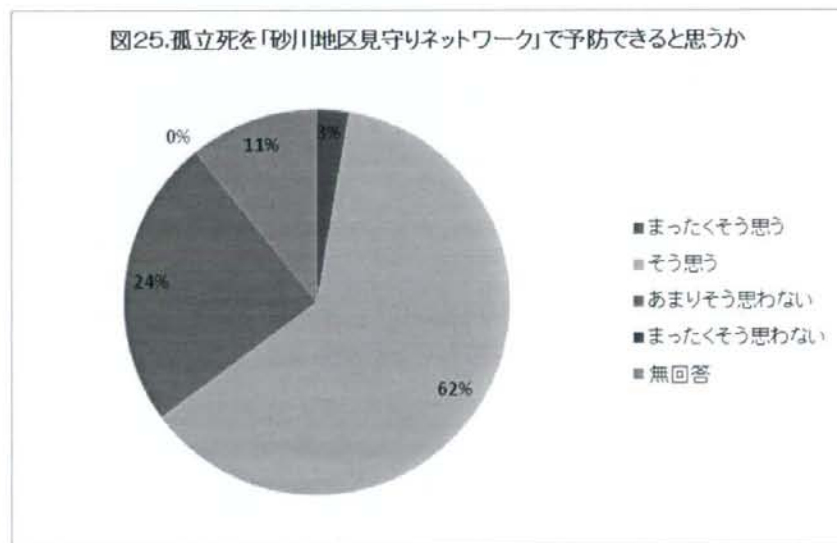
#### ①担当地区での孤立死の有無

「過去に担当地域で孤立死があったか」という問いに対し、「あった」と答えたものが 2 人 (5.4%)、「ない」と答えたものが 29 人 (78.4%) で、孤立死があったと回答した人は少なかった (図 24)。



#### (4) 孤立死の砂川地区見守りネットワークでの予防の可能性の有無

「孤立死を『砂川地区見守りネットワーク』で防げるか」という問いに対し、「まったくそう思う」と答えたのは 1 人 (2.7%)、「そう思う」と答えたものが 23 人 (62.2%) で、約半数が見守りで防げると思うと回答していた (図 25)。



(5) 地区の住民に感じていること

①信頼感の気づきやすさ

「築きやすい」と答えたものが3人(8.1%)、「まあ築きやすい」と答えたものが20人(54.1%)と約60%のものが築きやすさを感じていた(表21)。

表21. 信頼感の築きやすさ

項目	人数	%
築きやすい	3	8.1
まあ築きやすい	20	54.1
どちらともいえない	13	35.1
築きにくい	0	0.0
無回答	1	2.7

②住民が役に立とうと思うか

地区住民が役に立とうと思うかとたずねたところ、「とてもそう思う」と答えたものが2人(5.4%)、「まあそう思う」と答えたものが18人(48.6%)と、約半数のものが地区住民は役に立とうと思うと思っていた(表22)。

表22. 住民が役に立とうと思うか

項目	人数	%
とてもそう思う	2	5.4
まあそう思う	18	48.6
どちらともいえない	17	45.9
そう思わない	0	0.0

(6) 地域との付き合い方

①地域への愛着

地域への愛着についてたずねたところ、「とてもある」と答えたものが12人(32.4%)、「まあ愛着がある」と答えたものが24人(64.9%)と、95%以上のものは地域への愛着があった(表23)。

表23. 地域への愛着

項目	人数	%
とてもある	12	32.4
まあ愛着がある	24	64.9
どちらともいえない	1	2.7
あまりない	0	0.0

②近所づきあいの仕方

近所づきあいの仕方についてたずねたところ、「生活面で協力」と答えたものが18人(48.6%)と最も多く、次いで「立ち話程度」と答えたものが15人(40.5%)、「あいさつ程度」と答えたものが7人(18.9%)と、なんらかの付き合いを持っていた(表24)。

表24. 近所づきあいの仕方

項目	人数	%
生活面で協力	18	48.6
立ち話程度	15	40.5
あいさつ程度	7	18.9
付き合いなし	0	0.0



### ③近所との付き合いの人数

付き合いのある地域の人の人数をたずねたところ、「ほぼすべての人」と答えたものは3人(8.1%)、「地域半分程度の人」と答えたものは16人(43.2%)と、約半数の人は地域の半分程度あるいはそれ以上の人と付き合いがあった(表25)。

表25. ご近所との付き合いの人数

項目	人数	%
ほぼすべての人	3	8.1
地域半分程度の人	16	43.2
ごく少数の人	16	43.2
無回答	2	5.4

### ④活動に対する住民の思い

地域の人は見守りネットワークの活動についてどのように思っているかをたずねたところ、「感謝」と答えたものが3人(8.1%)、「世話好き」と答えたものが1人(2.7%)、「無関心」と答えたものが2人(5.4%)、無回答が28人(75.7%)であった(表26)。

表26. 活動に対する住民の思い

項目	人数	%
感謝	3	8.1
世話好き	1	2.7
余計なこと	0	0.0
無関心	2	5.4
その他	3	8.1
無回答	28	75.7

## 5) 孤立死を防ぐための方法の提案や意見

### ①家族や本人ができること

日頃のつきあいから交流や信頼関係を築く等の意見がみられた(表27)。

表27. 孤立死を防ぐための家族や本人ができること

- ・日頃より近所づきあいを大切にする
- ・本人が地域でのサークル等に参加して交流を深めること。健康状態が良くない人は近所・行政の方が見守ってくださればいいと思います。
- ・隣近所に一人で住んでいることを知っていただく。
- ・家族が大事にする思いを持つこと。電話でもいいから連絡を取り合う努力が望まれる
- ・若い人は家族のことを言わない傾向にある 信頼関係を築く
- ・常にTELで確認(私の場合は近くに住んでいるので訪問を心がけている)
- ・時間を決めて相互にTELで確認する
- ・何回も見守りに廻っていかなくてはならない。



## ②地域でできること

情報の交換や見守り、関係づくり等の意見がみられた（表 28）。

### 表 28. 孤立死を防ぐため地域でできること

---

- ・活動を広く知ってもらいたため広報に力を入れる
  - ・新聞が何日分もとっていない、水道を使用した（溝）ことがない様子等、ご近所の見守りが大切では・・・？
  - ・集会やサロンに出席するようにさそう。
  - ・向こう三軒両隣が仲良く暮らしていくこと
  - ・近隣のつながりを強固に回覧等の場合実際に手渡す。
  - ・家の巡り（洗濯物、庭等の片づけ）ができているか常に気を配る
  - ・隣近所が気を配り、情報の交換をする。
  - ・何回も見守りに廻っていかなくてはならない。
  
  - ・孤立死を防ぐには地域における人間関係づくり、特に隣近所との関係が大切で、高齢者が家から出て話しやすい、周囲との関係を持ちやすい環境作りが必要と思います。「高齢者になっても安心してくらしける街づくり」をと常に呼びかけ、誰にでもできる見守りの大切さを後援会や勉強会を開き、当事者にも理解していただければ・・・？
- 

## ③行政及び関係機関に求める役割

連絡や情報収集、実態把握等の意見がみられた（表 29）。

### 表 29. 孤立死を防ぐため行政や専門機関に求める役割

---

- ・書類や形式より実態把握と人道的に対処する
  - ・常に連絡できるシステムがあれば（個人～行政 直接にブザー等がなるよう）
  - ・お役所態度を捨てて、こまめに情報収集活動し、対応が求められる。
  - ・何回も見守りに廻っていかなくてはならない。
-

また、家族や本人、地域、行政といった区別なく、それぞれの連携についての意見が次の通りみられた（表 30）。

表30. 孤立死を防ぐための意見

- 
- ・一人暮らしの方（高齢者も含む）を普段から気をつけて見守ることと自治会や行政の協力を得て名簿を作成把握することが大事だと思います。（個人情報保護法に留意すること）
  - ・住民登録のしていない人や自治会に入会していない人もいるらしい。市も把握は難しいと思う。やはり近隣の情報が重要と思う。
  - ・今のところ地域の内情はわからないことだらけ。まず隣近所から少しずつ情報を得ることだと思う。各自自治体を通して班ごとに細かいネットで進めていけば？
  - ・日頃からいろいろな関係者が家庭訪問の機会があること。一日一度は誰かが本人と話をすることが大切だと思う。
  - ・密な連携がとれているか
- 

#### 6) 保健福祉サービスについての意見

実態把握や地域との連携、制度の検討、住民が関心を持てるかかわり、相互扶助ができればといった意見がみられた（表 31）。

表31. 保健福祉サービスについての意見

- 
- ・国で決まったところを府から市へ協力を依頼するのもいいが、もう少し市のほうで実態を把握して勉強してほしい。なんでも自治会やボランティアにいろいろするのはどうかと思います。
  - ・良くできているとは言えないが、担当者は努力されています。制度の中身について更なる検討をいただきたい（人や予算が必要だと考えます）
  - ・不正をしてまで援助を受けようとする情報を耳にすることがあるが、そういうことがないよう、また困っている人にたいしては十分保護が行き渡るように実態把握と地域の連携に努めてください。
  - ・地区へ行って教室を開く。
  - ・今現在の福祉サービスは行き届いていると思います。
  - ・年々以前よりも保健サービスが少なくなっているように思います。
  - ・地域との連携を一層深めながら進めてください。行政も頑張ってくれていると思います。
  - ・保健福祉サービスは本人の申し入れで動いていただけるのですが、なかなかサービスの内容がわかりにくく誰でもわかりやすい表などがあればいいと思います。
  - ・今まで福祉に関して関心がない人が大勢だと思う。→関心を持ってもらう事。昨年度、自治会の役をさせていただいて老人会活動、他の活動に協力させてもらい始めて活発にされていたことが判った。
  - ・このネットワークが順調に始動するともっと住みよい地区になると思う。ボランティアするもの・されるものの区別のない相互扶助ができれば（近所のよしみで）が理想です。
-

## 2. インタビュー調査

### <目的・方法>

#### 1) 目的

高齢者のセルフ・ネグレクトおよび孤立死を防ぐための地域見守り組織のありかたについて検討を行うために、見守り組織メンバーとなっている地域住民と見守り組織を支援してきた専門職へのインタビューデータを基にした質的帰納的な分析を行った。

#### 2) 方法

##### (1) 調査対象者と方法

本研究のデザインは質的帰納的研究である。

調査対象者は、了解の得られた4地区で見守り組織メンバーとなっている地域住民11人と見守り組織づくりを支援してきた地域包括支援センター等の専門職2人である(表1)。

表1 泉南市におけるインタビュー対象者の概要

[見守り組織の地域住民]					
面接状況	事例	性別	年代	地域での役職	該当地区 居住年数
グループ面接1	S1	女性	60代	民生委員	40年
グループ面接1	S2	女性	60代	婦人会役員	38年
グループ面接1	S3	女性	60代	民生委員、婦人会役員	37年
グループ面接2	S4	女性	70代	地区福祉委員、人権擁護委員	32年
グループ面接2	S5	女性	60代	地区福祉委員	32年
グループ面接2	S6	女性	50代	地区福祉委員 児童委員	32年
グループ面接3	S7	男性	40代	自治会長	14年
グループ面接3	S8	男性	60代	民生委員	32年
グループ面接4	S9	女性	60代	地区福祉委員	30年
グループ面接4	S10	女性	50代	地区福祉委員	30年
個人面接1	S11	男性	70代	民生委員 地区福祉委員	34年

[地域包括支援センター職員]					
面接状況	事例	性別	年代	職業	現職場での 従事年数
個人面接1	S12	女性	40代	特別養護老人ホーム 主任ケアマネージャー コミュニティ・ソーシャルワーカー	12年
個人面接2	S13	女性	40代	地域包括支援センター 主任ケアマネージャー	4年



面接時期は2008年8～9月に、インタビューガイドを用いた半構成的面接を研究者らが実施した。面接時間は約60分程度である。面接の形態は、個別に実施した場合とグループで実施した場合とがある。見守り組織の地域住民に面接を行う場合は、地域包括支援センター等の職員に同席してもらい、意見をいいやすい雰囲気になるように努めた。

インタビューガイドの内容は、大まかには「①調査対象者の知っている事例」と「②見守り支援に関する内容」とに分けられる。インタビューガイドは見守り組織の地域住民と専門職はともに、同様のものを使用した。

前者の「①調査対象者の知っている事例」については、在宅高齢者における孤独死の事例、見守りが難しい事例、見守りの必要性の有無が把握できない事例、孤立している住民をうまく援助できた事例およびできなかった事例について、できるだけ具体的に把握できるようにたずねた。

後者の「②見守り支援に関する内容」については、当該地区の見守りネットワーク活動で困っていること、当該地区見守りネットワークが行っている活動や行政・専門職との連携状況、当該地区見守りネットワークが果たすことのできる役割と今後の課題、高齢者の孤立や孤立死防止のために行政や専門職に求める役割、見守り組織をつくるまでの今までの経緯および地域包括支援センターや住民の働きかけや役割などについて、把握することを意図してインタビューを実施した。

以上のインタビュー内容について、調査対象者の同意を得てICレコーダー等に録音し、逐語録を作成した。なお、すべての対象者から録音の同意を得ることができた。

## 2) 分析

逐語録から高齢者の孤立死、見守り支援のありかたや組織づくりに関連すると思われる内容を意味毎にくぎり、可能な限り、対象者の表現を活用し、コードをつけた。さらに、コードをもとに、地区別比較をしながら、カテゴリを作成し、さらにカテゴリをまとめて、テーマとした。これらの分析過程では、研究グループ内で数回にわたり、討議を行い、コード、カテゴリ、テーマ等の表現と分析の適切性を確保するように努めた。

## 3) 倫理的配慮

調査対象者には書面と口頭で本研究の趣旨、目的と方法を説明し、対象者から文書にて同意を得た。また、調査協力は自由意思に基づくものであり、いつでも中止可能であること、研究目的以外では得られたデータを使用しないことを説明した。なお、本研究は、甲南女子大学看護リハビリテーション学部研究倫理委員会から承認をうけて実施している。

## <結果>

### 1) 見守り組織の地域住民へのインタビューの質的分析結果

地域住民へのインタビューから得られた質的分析についてのテーマとカテゴリを表 2~4 に示す。

表 2-1 見守り住民に対するインタビューから得られた質的分析の概要-1

テーマ	カテゴリ
孤立死のとらえかた	<p>元気な人が独りで急に亡くなることもある。</p> <p>自分の地域では孤立死は起こらない。</p> <p>見守っていても孤立死を完全に防ぐことはできない。</p> <p>見守っていても独りで急に亡くなることもある。</p>
孤立死発見のプロセス	<p>新聞がたまっていて孤立死に気づいた。</p> <p>電気がついたままだったので孤立死に気づいた。</p> <p>雨戸を閉めていなかったので孤立死に気づいた。</p> <p>見守りのために訪問したら独りで亡くなっていた。</p> <p>孤立死をした高齢者は死後、家族と連絡がとりにくかった。</p> <p>予め連絡先を把握していたので孤立死後も家族に連絡をとりやすかった。</p>
見守り対象となる高齢者	<p>人に頼ろうとしない高齢者</p> <p>人とのつながりを拒否する高齢者</p> <p>人との交流が少ない独居の男性高齢者</p> <p>地域とのつながりが少ない集合住宅に住む高齢者</p> <p>近所づきあいから孤立している高齢者</p> <p>近所に知らせずに家を空ける高齢者</p> <p>個人情報保護の理解が異なり自分の情報を話さない高齢者</p> <p>家族関係の問題が多い高齢者</p> <p>認知機能低下による問題行動がある高齢者</p> <p>火の不始末をする高齢者</p> <p>食事をしていない高齢者</p>

表2-2 見守り住民に対する面接から得られた質的分析の概要-2

テーマ	カテゴリ
見守りのための テクニック	<p>対象者のニーズに応える</p> <p>見守りの訪問より、サロンを勤める方がとっかかりやすい</p> <p>サロン参加者に電話でフォローしている</p> <p>既存のサービスを使って、安否確認をする</p> <p>変化があれば声をかける</p> <p>用がなくても近くに行き声をかける</p> <p>相手の気持ちに立ち入りすぎないで、見守る</p> <p>情報提供をしている</p> <p>長い支援の積み重ねにより関係づくりができる</p> <p>高齢者と長い間付き合っていると見守りをしやすい</p> <p>管理組合の名簿から見守り対象者を把握</p> <p>高齢者の理解を深めることが必要</p>

表2-3 見守り住民に対する面接から得られた質的分析の概要-2

テーマ	カテゴリ
見守りのための 組織作り	<p>既存組織があり、見守りに活用しやすい</p> <p>行政と連携をとる必要がある</p> <p>住民組織間で情報を共有する</p> <p>地域包括支援センターは連携しやすい</p> <p>地域包括支援センターの周知が必要</p> <p>地域包括支援センターと情報を共有したい</p> <p>組織作りの過程での行政のバックアップ</p> <p>リーダーとバックアップする人がいれば組織は大きくなる</p> <p>組織づくりの核が大切</p> <p>男性に支援者になってもらう</p> <p>地域の絆の強さ</p> <p>転入者が多く、協力し合う思いがあった</p> <p>子育て時の付き合いが地域づくりに生かされている</p> <p>近隣住民が気にかけてくれる</p> <p>近所同士で助け合いたい</p>